



LGSシステムの「建て方」作業。システムという言葉を実感できる瞬間。



左の写真は、LGSシステムの骨組みを東京・浅草のにぎやかな町中に実際に組み立てているところを撮影したものです。

3.2mmの薄い鋼材をCの字型に加工した、通称Cチャンネルという材料。さきほど説明しましたように一般には、壁の下地や屋根の母屋など、建築の見えない部分に使われている副資材です。このCチャンネルを横巾1m80cm、縦2m70cmの長方形に溶接してパネル状の部品に工場で加工します。現場では、工場で製作したパネルを一枚一枚、丁寧に連結して建物の骨組みが出来上がっていきます。パネルの大きさは、原則的にはすべて統一されています。同じ大きさのパネルを、ただひたすら、組み立てていくのです。3F建てまでなら、大きなマンションから、店舗、住宅、平屋の別荘まで、どんな建物も建築することができます。このような、考え方の建物を私たちは、子供のおもちゃを想像しながら「レゴ建築」と呼んでいます。

#### 江戸庶民の規格住宅、在来木造建築のシンプルなシステムに学ぶ。

江戸時代に、都市の人口が増大し、そこに住む人々の住宅（長屋）が多数建築されました。たぶん、その部材も規格が統一されたとてもシンプルな「システム」になっていたと私たちは実感を持って想像することができます。もちろん当時は機械化されているわけではないので、木の部材を手作業で加工するのですが、間口、奥行き、面積、柱の数、など規格が統一されたものになっていました。当然それを構成する柱や梁の部材も、ほぼ同じ形のものだったのです。その規格の制約のうえで、人々は豊かに、生活を営むことができました。建物のかたちで個性を表現することなど、当時の人には思いもよらなかったことでしょう。そして、形の

個性などより、基本の骨格の合理性を重視するのがLGSシステムの考え方でもあります。一種の原点回帰です。

江戸期木造のシステムは、明治以降の西洋木造建築の影響を受けて変形しながらも、基本的には今に受け継がれています。あまり知られていないことですが、近世の木造のシステムをこれほど広範囲に今に受けついているのは、世界でも日本特有のことなのです。

#### LGSシステムは、生活の基本単位をシステム化したもの。

江戸期の木造建築のエッセンスが、長い期間にわたって生き延びている最大の理由は、それが人間の間尺、「モジュール」を規格化したものだからです。「立って半畳、寝て一畳」と言いますが、日本家屋は、生活の基本モジュールを「畳」という「単位」が反映しており、「畳の基本単位」を基準に建物の大きさ、間口、骨組みの長さなどが、体系づけられているということ。人々の日常生活と「システム」の相関関係と素晴らしさが、江戸期の木造住宅の基本を長い間生き延びさせているのです。

LGSシステムもその意味では、1.8m単位でパネルを構成して、日本人の身体感覚に染みついたモジュールを踏襲しています。部材の単位で全体を構成するというアイデアは畳とまるで同じです。ある意味でLGSシステムは、温故知新の「立体モジュールシステム」なのです。

それにしても、現代の子供たちは、その身体感覚の中で、すでに「畳」という基本単位がなくなっています。すべてが洋間になったからです。また一つ大事な宝物をニッポン人は失おうとしているのです。

# Answer